二〇二二年九月三〇日

ケアバスを外に出て待てり秋日和　せいじ
力石取り囲めるは力芝　うつぎ
つる葎引けば零余子のついてをり　たか子
秋晴の瀬戸に散ればるしらす漁　千鶴
駅頭におばけ顔なる大南瓜　あひる
稲の香や夜汽車は光こぼしゆく　ひのと

二〇二二年九月二九日

香久山へ刈田の畦の延びにけり　明日香
天辺で呵呵大笑す柘榴あり　たか子
秋天下ウォークラリーの寺社巡り　こすもす
朱の回廊わたる白無垢秋澄める　もとこ
母の手はいつも濡れをり菊膾　ひのと
手を止めて流星仰ぐ装蹄師　ひのと

二〇二二年九月二八日

原子炉へ上る鋼のやうな月　ひのと
コロナ禍の公園ベンチ秋の声　満天
爺の手の皺にどんぐり並べたり　なつき
夕陽背に浴びて畑の菜を間引く　あひる
棟上を祝ふ一声鵙高音　素秀
大南瓜でんと構へて道の駅　素秀

二〇二二年九月二七日

ひつじ田に飛び込むホームランボール　豊実
野仏の謂れは知らず曼珠沙華　うつぎ
風音は喝采に似て稲稔る　ひのと
試歩の足止めて秋津の群の中　ひのと
この縁や文豪旧居秋惜しむ　澄子

二〇二二年九月二六日

身を反らし蟷螂風に立ち向かふ　うつぎ
爽やかな風のくすぐる野点かな　もとこ

二〇二二年九月二五日

嗚呼友よ霧の北鎌尾根に逝く　せいじ
秋の蚊の耳元過ぎる羽音かな　あひる
煙草屋の残る街角星月夜　ひのと

二〇二二年九月二四日

鎌引きぬ稲束ザクとひと握り　千鶴
鬼籍なる夫へ母へと栗の飯　うつぎ
山霧や朝湯へ向かふ下駄の音　ひのと
友逝けり秋深みたる槍ヶ岳　あひる
秋嶺の影濃く落つるトラピスト　むべ
献血車降りて夜学の門くぐる　ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年一〇月三日